真山一郎の現代浪曲三部作

解説　飯山栄浄

遂に出た!! 社会問題として国民に大きな衝撃をあたえた公害の原点水俣病を描いた浪曲「日本の黒い水」が遂に出ました。意欲に燃える真山一郎が体当りをくれたドキュメンタリーである。交通事故をとりあげて大ヒット作「日本の母」戦争への怒りを強烈に歌いあげた原爆の「あゝヒロシマ」そしていまここに公害水俣病を訴えた「日本の黒い水」これでわれ／＼に最も身ぢかな現代三悪をテーマに取りくんだ真山一郎の社会派浪曲三部作が完成したわけである。荒れ果てた浪曲の原野を、次々と話題作をかゝげて突進する好漢真山一郎。彼こそ浪曲の存亡にいのちをかけてその最先端をいくほまれある旗手なのだ。この彼に挑戦するつわものが多く出れば出るほど浪曲の未来はあかるい。浪曲もいまや戦国時代のように群雄割據して大いに振いたってほしいものだ。あげ潮になったこのブームこそ絶好のチャンスである。このときこそ勉強してほしい頑張ってほしい。ブームはすぐ去る。去ったあとになにも残らなかったら悲しいではないか。新しい浪曲を生みだしそれを育てる以外に発展の道はないのだ。古い浪曲を食い潰しその汁を吸って骨をまき散らす連中では仕方がない。とまれ、真山一郎は浪曲存亡にいのちをかけ、いまや活火山のごとく活動を続けている。

「日本の黒い水」

日本列島はいまや公害の黒い水のなかに横たわり大きくあえいでいる。その苦悶の表情は刻々と深まっていくことであろう。このまゝ放置すればやがて滅亡の海に身を沈めていく船体そのもの、姿である日本なのだ。

この浪曲は水俣病患者である、女性の生態とその魂にスポットをあてたものである。不治の奇病にのたうち苦しむ患者の叫び。加害者も被害者も共に救われ難いいがみあいを見せたことは悲しい。神を忘れた人間たちの悲劇図をここに見る。この浪曲には解決らしい解決はない。解決は聞く人々の心でつけてほしい。人間の皮きたけだものでない限り、神をおそれる良心の持主である限り、きっと正当な裁きと解決をつけて戴けると思う。神と人間の良心に訴えんがために私はこれを浪曲に書いたのです。資本主義はいまや大きな怪物となって人間の生命を犯し、その肉を喰いつゝあるのだ。この水俣病にそっぽをむく人たちよ！　あすの日にわが妻子わが良人がこのような公害病に患ったらどうします。それでもあなたはそっぽをむきますか。あすのわが身に誰がこのような病気がおこらぬと断言出来よう。日本の黒い水はまず／＼その汚染度を増しつゝあるのだ。

この浪曲の女主人公は実在の人物である。その叫び声は現実のものであることを心に刻みこんで聞いて戴きたい。この問題は加害者が被害者に金銭的つぐないをして済むべき問題ではない。いかにしてこの公害をくいとめるかである。神をおそれぬ人間どもが大きく肥え太る限り、日本の黒い水は濁る一方なのだ。そして人間は刻々と滅亡へちかづいていくのだ。誰かいま大きな声で叫び出さないか、「人間はそれでいいのか！」と。

「悲恋足摺岬」

太平洋の水平線からもりあがりふくれあがって押し寄せる荒波ががんぺきの岩に砕けて、白い雪のような飛沫が天に舞う。眼をとじるとこの光景がいつでも私の脳裡に浮ぶ。そして海鳴りが耳の底にまぼろしの音をつたえる。足摺岬のがんぺきに私はひとりの女性を立たせる。そこにおのずから一篇のドラマが展開するのだ。悲恋足摺岬！　これは女として生きるか、母として生きるかの問題をテーマにした作品だ。濃厚な事実を思う存分フィクションの世界に展開させたものである。私は思う。こんな物語の浪曲が過去にあっただろうかと。わが真山一郎なればこそこんな浪曲をもやり得たと絶賛したい。

「ナニワブシか」と浪曲を軽べつする人たちよ、是非真山一郎の浪曲を聞いて戴きたい。こんな浪曲も出来ていたのかときっと驚かれるにちがいない。若い世代の人たち、そして学生諸君、是非この現代最高話題作である水俣病の「日本の黒い水」だけは聴いてください。人間の皮きたけだものでない限り一人残らず聴いてください。

歌謡浪曲

石牟礼道子著〝苦海浄土〟より飯山栄浄作並主題歌作詞・作曲三保早苗

日本の黒い水

あゝ水俣病

飯山栄浄作並主題歌作詞・作曲三保早苗

悲恋足摺岬

日演 真山一郎

曲師 東山菊枝

演奏 ローオン・オーケストラ

〈A面〉

日本の黒い水

声「銭な一銭も要らんけん、そんかわり会社のえらか衆の上から順々に、水銀母液ば飲んで貰おう、上から順々に奥さん方も飲んで貰おう、その後順々に死んで貰いましょう。

水俣病になって貰うとたい、それがよか、それがよか!!」

〈水俣の　水俣の
病くるしや　怨みの声か
土をかけずり　天をつく
誰が裁くか　この罪を
神をおそれぬ　日本の
黒いこの海　黒い水

声「畜生!!　見とれえ、覚えとれえッ」

〈吐きだす煙水俣の、空の汚れたスモッグを、通して地上に降りそゝぐ、恵みの光
太陽に、土の息吹かかげろうか、南九州
五月の昼は、指でふれれば染りそな、山
の緑が眼にしみる

ゆき「おどんに水俣病の事ば話せと云はれっとですか。おどんな、く、口がもとらんけん、案定聞いてはいよ、おどんな四十ちこうなって、茂平ぢいさんのあといれに嫁に来たとですたい、天草から海ば越えち。嫁に来て三年もたたんうちに、こげん病気になって残念かです、おどんな一人では着物の前もよう合わせきらん、手も足もこげんふるえとっでっしょが、月のもんも自分で始末しきらん女になってしもち、ほんなこて情けなか、こげん恥かしか思いばすっとなら、月のもんばとめてはいよって病院の先生に頼んで見たばってん、ありやとめたら体に悪かちうてな……、ほんなこてこげん体になってしもち悲しか。おどんな前は達者かった、手も足もぎん／＼しとった、ようきばって仕事もしたっですたい、おどんなどげんしても、もう一べん元の体に返してもろち、自分で舟ば漕いで海へ行きたか。茂平ぢいちゃんとふたりで魚ば取ったあん頃は、

海ん水もすき透って硝子んごつ美くしかった。あん頃の海はほんなこてよか海だったもんな」

〈声も慄えりゃ体も慄う、なおるあてない
水俣病に、見るも哀れにやせ細り、中ば
狂える此の女、坂上ゆきの記憶のなかに、
浮ぶあの日の思い出は、波が砕けて潮の
香が、胸にひろがる不知火の、海ですな
どるいざり舟、舟は二十櫓の夫婦舟

茂平「えんしょい、えんしょい、えんしょい、えんしょい、〈沖でかもめの、啼く声きけばよう」

ゆき「あんた、あんたて」

茂平「聞えとる、〈舟乗り稼業がやめらりょうかようなんて、ゆき」

ゆき「唄の済んでしもちから返事しとる、おどんな今度こそ出来たらしかばい」

茂平「なんが出来たて」

ゆき「赤子、赤ちゃんたい」

茂平「赤ちゃん？　赤子がかい」

ゆき「うん、とげんしょか」

茂平「どげんすって、どげんもこげんもなか、出来たもんな生んだらよかったい」

ゆき「生んでもよかな、ほんなこっな」

茂平「よか、年とってからの子は特別可愛いかて云うもんな」

ゆき「おどんな、こん年ば取って子供んなかけん、今度こそほんなこて生みたか」

茂平「生んだらよかたい、おるも未だこげん元気だけん、赤子の一人ぐらい大きゅうするとは何の事なか、さあ、今日はいっぱい魚ば取って帰ろう」

ゆき「おどんなそんとき、ほんなこて嬉しかったばい。女ん子でもよか、男ん子ならなおよか、今度はどげんしても生んで育て、やろうと思てな、毎日まいにち、ぢいちゃんと海へ行って魚ば取ったとです。ところがしばらくすっと、おどんな体んおかしゅうなって来たとですたい」

ゆき「あんた、おどんな、ひょっとすっとヨイ／＼病じゃなかろか」

茂平「なんばいうとっとかい、そげん馬鹿なこつがあっか」

ゆき「ばってんあんた、おどんなこん頃体んおかしかったい、手と足んしびれち、なんのこつなかばってんかよう物につまづくとたい」

茂平「心配すっこつなかて、ヨイ／＼病とかハイカラ病ちいうとは、つまり栄養ん足らんもんのなる病気たい、くよ／＼すっこつなか、魚でんいっぱい食て元気ば出さんか」

ゆき「そげんだろか、おどんな一人じゃなか、お胎ん赤子と二人だけんな、二人分食べんば栄養ん足らんとだろか、あハ……」

ゆき「そうたい／＼栄養ん足らんとばい、おどんなそげん思て、魚ば一生懸命無理して食たとです、なんば食ても冷汗ばかり流れちいっちょん元気にならんとです、元気になる訳がなかですたい、そん魚ん中に有機水銀とかちいて、水俣病の原因になるもんがいっぱい這入っとったとですたい、それは全部、そん会社が海に流しよったとですたい」

〈思えば不思議それ迄に、魚を食った猫達
が踊りおどってきり／＼と、海に飛び込
み死んで居た、水俣湾の渚には、魚をあ
さる水鳥の、黒い死骸が點々と、落ちて
ころがる砂の上、貝はぽっくり口をあけ、
暑い真夏の太陽に、肉がくさって悪臭が、
あたり一面たゞよえば、茂道湯堂に月の
浦、坂口出月双子島、丸島舟津、津奈木
にかけて、病んで倒れて死んで行く、人
は次才に数を増す

ゆき「おどんな入院すっとすぐ、子供ばおろされてしもたとです、胎ん子も水俣病の胎児性のおそれがあるちいうて……。気んついた時にはお胎はぺしゃんこ。ピクピク動いとったお胎ん子はもうおらんとです。赤子はどこへ行ったとな、おどんな太か声ば出して一晩中泣きました」

ゆき「おどんな三回嫁入りしたばってん、子供運の悪うて、生んだばってん死に、育てたばってん死なせてしもち、今度もこげん病気で親ん体が大事ちうて、生きてるもんば機械でこさぎ出したかと思たら、子供に申訳けのうて、申訳けのうて……。御飯の時、お膳の上に魚が一匹ついて来ました、そん魚ば見っと、赤子が死んで帰って来たかと思いましたばい、おどんの赤子もこさぎ出されて血んついたまんま、皿ん上んのせられて、どっかへ持って行かれたかと思たら、皿ん上んのった魚が、おどんの赤子のように思えてならんかった。頭ん血がのぼるちいう事だろかそん魚ば見て、お、、赤子!!　こっちへ来なっせ、母ちゃんとこへ早う来なっせ、おどんな手ばのばしてそん皿ばとろうと気張るばってん、気張るばってん、痙攣がよけいきつうなって、皿と箸がカチカチ音ば立てち、箸が魚ば突ッつき落すとたい、魚が、おどんの赤子がお膳の上から飛び出してベットの下へ逃げて行く、ありゃ赤子と違うと、魚だけんと思うばってん、頭ん中が又赤子ごつでいっぱいになっとです、赤子!!　赤子!!　おどんの赤子」

〈かッと頭に血がのぼりゃ、箸もお膳も投
げ出して、身を慄わせてむせび泣く。泣
けば涙がとめどなく、湧いて溢れて流れ
出て、死んだ赤子のまぼろしが、母の心
をかけめぐる、こんな病気にならなけり
ゃ、生んで育て、やるものを、誰が殺し
たあの赤を、毒を流してその毒で、人を
殺して平然と、空うそぶいて生きている、
そんな奴等を人間を、神よあなたは何故
許す

声「大学病院の医学部なおとろしか。ふとかまな板のあっとだもん、人間ば料理するまな板のあっとばい」

声「死んだらおどんも解剖さすとよッ」

声「有機水銀のはいった毒の此の頭ばちょんぎって、今度はよか頭で生れて来うごたる」

ゆき「おどんな病院でなんも食べとうはなかばってん煙草ん吸いとうて、吸いとうて、煙草は頭に悪かちうて病院の先生にとめられとったばってん、おどんなちょくちょく吸殻ば拾うて吸うたとです。どげんか歩けるごつなって診察うけに出た時ですたい、廊下に吸殻ん落つとっとです、うわあッ、あそこに吸殻ん落っとる、嬉しか、嬉しか、あそこ迄いっちょまっすぐに歩いてゆこごたる、そげん思て一足踏み出そうとするばってん、いら／＼して足がもつれち前に出まっせんもん、あゝもう自分の足乍ら云う事ばきかん、はがゆか、頭にカッときて、そん時又あのひっくり返るような痙攣がきたとです、痙攣はむごたらしか、自分の頭ん命令せんばってん、いきなりツツツウッと足が勝手走り出すとだけん、とまろうと思う暇もなか、しもたッ、吸殻ん落つとっとこげ通り過ぎてしもた!!　眼がくらくらしてやっと後ば振りむいち、むいた方へ行こうと思うばってん足がちょっとも云う事ばきゝまっせんたい、えゝッ、腹ん立つ、畜生ッ」

茂平「ゆき、どげんな、又痙攣がおきたとか」

ゆき「あゝ、く、く、苦しか。なんでおどんなこげん病気になったっだろか、ぢいちゃん、あんたが悪かとたい、魚ば食え、食えいうち食はせち、あんたと一緒にならんかったら、天草から海ば越えて来んかったら、おどんなこげん病気にはならんとすんだっばい、おどんばこげん病気にしたつはぢいちゃん、あんたたいッ」

茂平「なんて、お前それはほん気でいうとっとか」

ゆき「ほん気たい、あゝ、本気の本気たい、ひとの補償金まで取ってしもて!!」

茂平「よし判った、そうかもうそれだけ聞けばよか、ゆき、わしは今お前ときっぱり別れたるたい」

ゆき「別れらよか、別れるごつあったら別れたらよか」

ゆき「おどんな、なんちゅう馬鹿なこつばいうたっだろ、ぢいちゃんな腹立てて二度と病院に

は来て呉れまっせんでした」ゆき、お前しょんなかおなごになってしもたなあ、というち、月のもんの世話迄して呉れたぢいちゃん、おどんの為にはほんなこてようしてくれたぢいちゃん、なんぼ自分の病気が苦しかちいうたばってん、あげんこつば云うちぢいちゃんなおこらせてしもたおどんな、なんちゅう馬鹿な女っだろ、ぢいちゃん、頼むけんもう一辺帰ってはいようッ。おどんな毎日ひとり言ばいいました。ほんなこて思い出してもおかしか、ついこの間の事ですたい。

看護婦「ゆきさん、あんたなんばしとっと、紙で舟ばつくって、糸ばつけて廊下ば引っぱって」

ゆき「看護婦さん、おどんなもう病気ようなったけん、これから舟ば漕いで海へゆこうごたる、ぢいちゃんがおらんけん早う呼んで来てはいよう」

看護婦「そう、病気がなおってよかったな、じゃこの舟にキャラメルと飴ばのせてあげるけん、元気で海へ行って来なっせ」

ゆき「有難う、看護婦さん、じゃ行ってくるけんな、帰りには水銀のはいっとらん魚ばいっぱい土産に持って来るけん、えんしょい、えんしょい、えんしょい……、ぢいちゃん!! ぢいちゃんッ!!」

歌謡節〈遂にふれたか　狂うたか
廊下で舟を　引きながら
返らぬ人を　ぢいちゃんを
力の限り　呼んで居る
其の身貧しく　芋と麥
食うて育った　天草の
女ごころは　島椿
燃えて男の　胸に咲く
あゝ其の夢もしあわせも
消えてもがれて　裸木の
枯れて散るのか　果てるのか
哀れ女の　乱れ髪

声「畜生!!　見とれえ、覚えとれえッ」

〈水俣の　水俣の
病はてなし　のろいの声が
土をかけずり　天を飛ぶ
誰がうけるか　この罰を
神にそむいた　日本の
黒いこの海　黒い水

（時間二十七分一二秒）

悲恋足摺岬

〈B　面〉

〈耳に聞える海鳴りが、胸にとゞろく荒波が、今日もわたしを呼んでいる。そしてわたしは潮風に、交じる白髪をなびかせて、身の毛もよだつ足摺の、岬へ通うこの道をひとり歩いて来たのです。咲いた椿のあの花を、見れば不思議やこの胸に、女ごころがときめいて、ぽッとあかるい灯をともす

三枝子「あの娘は結婚して、とう〳〵わたしからはなれていった。それでいゝの、それでいゝのよ。幸福になって、可愛いゝナオミ」

解説「足摺岬のがんぺきに立って、じっと海を見つめる老婦人三枝子の胸に、遠いあの日の思い出が、悲しくなつかしくよみがえってくる」

主題歌〈親もわが子も　家も捨て
暗い夜道を　逃げてきた
恋に迷いの　目なし鳥
抱いて抱かれた　黒髪が
濡れた悲恋の　母椿

英次「どうしたの、三枝子さん」

三枝子「ごめんなさい、泣いたりして」

英次「そんなに心配をしなくても、そのうち、ナオミちゃんはきっと僕たちに引きとらしてくれるよ」

三枝子「駄目よ、とても封建的な親だから、いゝの英次さん、わたしをはなさないで!」

英次「はなしやしないよ、僕はこんなに君を愛しているんだ」

三枝子「嬉しい、わたしこんな気持になったのはじめて、親たちに責められて……、不幸な結婚をした女ですもの」

英次「三枝子さん、僕だってもう君なしでは生きていけない気がするんだ」

配達「松村さん、電報ですよ。浜崎三枝子さんて方……」

三枝子「はい、わたしです。あッどうも……。あッ英次さん、ナオミが危篤だって!」

英次「えッ、危篤?」

三枝子「そうよ、わたし、どうしたらいゝかしら」

英次「どうしたらいゝって、すぐに行ってやらなくちゃ」

三枝子「行っても、いゝの」

英次「そりゃいゝけど、今度また家を出て来る事が出来るかなァ」

三枝子「出てくるわ、どんなことがあっても」

英次「僕はなんだか、このまゝ君と別れてしもうような気がするんだ」

三枝子「帰ってくる。わたしどんなことがあっても帰ってきます」

英次「じゃ、約束してくれるね」

三枝子「するわ、どんな約束でも」

英次「三枝子さん、僕は君とはなれることが、堪らなく淋しいんだ」

〈別れせつない接吻も、なぜか今宵は胸騒ぐ。恋し男にうしろ髪、引かれる思いの夜の駅。熱に浮かされ母を呼ぶ、可愛いナオミのまぼろしに、心乱れて気もそゞろ、戻る列車の窓のそと、眠れぬまゝに夜があけりゃ、寄せては返す荒波が、岩に砕けて渦をまく。つがいはなれた海鳥が、どこへ飛ぶのか消えるのか。空に白雲流れ雲

父親「三枝子、お前はあの男と別れて帰って来たのか」

三枝子「いゝえ、わたしナオミを見にかえって来たのです」

父親「お前のような女にでも、少しはナオミのことが気になるのか」

三枝子「気になります。わが子ですもの」

父親「それなら、なぜあの子を捨てゝ家出をした。少しは恥を知りなさい。小学校の教師と駈け落ちするなんて、なんということだ。わしはこの町の町長として、世間に顔むけがならん。帰って来たからにはもう絶対に家を出さない。そのつもりでいなさい」

母親「三枝子、お父さまにあやまりなさい。そして早くナオミを見てやっておくれ」

ナオミ「あッ、お母ちゃん!」

三枝子「まあ、ナオミちゃん!」

ナオミ「お母ちゃん、帰って来たの、もうどこへも行っちゃいやッ」

三枝子「あんたまだちょっと熱があるのね、もうすこしおねんねして、早くよくなるんですよ」

ナオミ「ナオミよくなったら、お母ちゃんまたどこかへいくの。ねえお母ちゃん、どうして黙っているの、行っちゃいや、行っちゃいやッ」

歌謡節〈両手で母の　手を握り
どこへも行っちゃ　いやですと
見あげるつぶらな　瞳から
とめどもなくに　溢れ出る
涙を見ては　なぜ堪ろう
思わず抱いて　引きよせて
頬ずりすれば　母と子の
熱いなさけの　血が煮える
許しておくれ　ナオミちゃん
あんたを残して　この母は
ふたゝび家を　出るのやら
恋に身をやく　迷い鳥

解説「わが子の病気もよくなって、元気に学校へ

通うようになった」
ナオミ「お母ちゃん、ただいま」
三枝子「おかえりなさい、早かったのね」
ナオミ「今日は土曜日だから早いの、あのねお母ちゃん、ナオミ学校から帰って来るまで、とっても心配なの」
三枝子「なにが心配なの」
ナオミ「だって、お留守のあいだにお母ちゃんがまたどこかへ行ってしまいやしないかと……」
三枝子「まあ、心配しなくたっていゝの、お母さんもうどこへも行かないから」
ナオミ「ほんと、ほんとにもうどこへもいかないの！」
三枝子「ほんとよ、だからもうなにも心配しないで、いっしょうけんめい、勉強するんですよッ……」

〈こんなにまでも慕いよる、可愛いわが子を捨ておいて、どこへ行けようういかれよう。この世のなかに生れきて、母と呼ばれて子と呼ぶは、きれぬ縁の糸ぐるま、まるくまわってくる／＼と、女の夢も幸福も、捨てゝわびしく生きるのが、それが浮世の母の道

母親「三枝子、よくそこに気がついてくれたね。お父さまも喜んでおられますよ。ナオミもこれでしあわせ、あんただって、正式に婿養子をとればきッとしあわせになれますよ」
三枝子「お母さん、よしてそんな話は、わたし絶対に結婚はしません」
ナオミ「お母ちゃん、ナオミといっしょに、海へいきましょうよ」
解説「わが子ナオミに手を引かれ、そゞろ出て来た海辺には、かつて英次と歩いた思い出の道、思い出の渚がそこに有った」
ナオミ「からす、なぜなくの、からすはやまに、かわいゝな、つの子があるからよう、かわい、かわいとからすはなくの、かわい、かわいと、なくんだよう」
解説「わが子が歌う歌声が、なぜともなく三枝子の心をかき乱すのであった。そしてある日のこと」
君子「三枝子さん」
三枝子「あ、君子さんしばらく、どうかしたの」
君子「わたしさっき、英次さんに逢ったの」
三枝子「えッ、あの人、来ているの」
君子「はい、お手紙」
三枝子「あの人から手紙？　ありがとう、君子さん」
解説「三枝子はかくれるようにして、その手紙をひらいた」
英次の声「三枝子さん、僕はあなたがきっと帰ってくれると思って、毎日まいにち待っていたのです。それをいまさら別れてくれと手紙をよこすなんて、僕には信じられない。あんなにまで固い約束をしながら、どうして別れる気になったのか、僕にはあなたの気持がどうしてもわからない。僕は苦しい、死んでしまいたいほど苦しいッ……。僕はとう／＼この町へやって来ました。昨夜もその前の夜も、僕はあなたの家の塀のところに立っていたのです。この塀のなかの、どこかの部屋にあなたがいるとわかっても、どうすることも出来ず、僕はまた引き返して来たのです。三枝子さん、たとえ別れるにしても、いま一度逢ってください。僕は今夜海岸の夫婦岩のところで待っています。あなたも思うようには出て来られないと思いますから、時間はなん時でもかまいません。夜のあけるまで、僕はそこで待っています」
解説「その夜家の者が寝静まって、三枝子はそッと家を出た」
父親「三枝子、どこへいく」
三枝子「あッ、お父さま」
父親「こんな夜更けに、どこへいくのじゃ」
三枝子「お父さま、英次さんが来ているんです。一度だけ逢わせてください」
父親「なにをいうとる。お前はあの男と別れるといったのは嘘だったのか」
三枝子「嘘ではありません、きっと別れますから、最後に一度だけ逢わせてくださいッ」
父親「ならん、逢わすことは断じてならん。早く家へはいりなさい」
三枝子「お願いッ、お父さま」
父親「ならんといったら、ならんのじゃッ」

〈遂にせかれて　はばまれて
逢うことさえも　出来ぬ身が
なんでねむれる　筈はない
月の夜更けの　波打ち際で
わたしの出てくる　足音を
いまかいまかと　待ちながら
どんな思いで　いることか
なやみ疲れた　窓のそと
啼くは夜明けの　ほとゝぎす

解説「足摺岬の断崖から身を投げた英次の死骸が見つかったのは、それから三日目のことであった」
解説「はげしく荒れ狂う暴風雨の夜。ひとりねむらず三枝子はいつまでもいつまでも起きていた。そばではナオミがすや／＼とねむっている。枕もとに置かれた一通の遺書！　三枝子は影のように立ちあがって戸外に出た」
三枝子「あなた！　英次さんッ、待っていてくださいね、わたしはいまからあなたの側へかえっていくのよ。あのときは約束にそむいてかえらなかったけど、今夜はこうして思い存分に走りながら、あなたの側へかえっていくのよ。両手をひろげて、しっかり抱いてむかえてくださいね。今度こそもうはなれなくてもいゝのよ。あなた！　三枝子はこんなにたのしく走りながらかえっていくのよ！　あなたッ、英次さあんッ!!」

〈呼べば答えてこだまする、海の叫びか嵐の声か、風に乱れる黒髪に、散るは涙か夜の雨。哀れ悲恋の母椿、こけつまろびつ出て来たは、恋しき人があの人が、その身を投げた岩のうえ、立てば砕ける荒波が、闇の夜空に乱れとぶ

父親「矢っ張りここだ、三枝子!!　あッ、危い、なにをするんだ」
三枝子「お父さん、はなしてえッ」
父親「三枝子！　待ってくれ」
三枝子「はなして、あの人を殺して、わたし生きてはいられないッ」
父親「許してくれ、英次を殺したのはこのわしだ」
三枝子「はなして、死なして、あの人が……、あの人が呼んでいる！」
父親「なにをいう、三枝子！　お前にはここにいるナオミの顔が見えないのか」
ナオミ「お母ちゃんッ、死んりゃいやッ、死んじゃいやようッ」
三枝子「ナオミ！　ナオミちゃんッ」

主題歌〈ひしとたがいに　抱きあう
母子ふたりの　髪の毛を
吹くは嵐か　夜の風
雨にうたれて　傷ついて
生きる悲恋の　母椿

三枝子「あれからもう二十五年。わたしは生きた。可愛い、わが子のためにすべてを忘れて生き抜いた。そのナオミも結婚してはなれていった。親たちも死んでもういない。わたしはひとりぼっち。それでいゝの、それでいゝの、それでいゝのようッ」
（時間二十五分四十六秒）

ローオンレコード株式会社　RD-5002　¥1,300
レコードから無断でテープその他に録音することは禁じられております。